

ポンド、当局者の発言に注目

- ◆ポンド、8月会合控え MPC メンバーの発言に注目
- ◆ポンド、コロナ感染の再拡大が続けば規制の完全撤廃はマイナス材料に
- ◆加ドル、投資家のリスクオン・オフで神経質な動きか

予想レンジ

ポンド円 148.50-153.50 円

加ドル円 86.00-89.00 円

7月26日週の展望

来週は英国内で主な経済指標の発表や注目のイベントは予定されておらず、コロナ感染拡大の状況や、8月5日にイングランド銀行（BOE）の金融政策委員会（MPC）を控え、メンバーの発言に注目の展開となる。英政権は19日にコロナ規制の完全撤廃に踏み切ったが、今週は1日のコロナ新規感染者数が5万人を超えるなど、感染再拡大への懸念が強まっており、決して歓迎ムードにはなっていない。早くも、17日にはコロナ対策の主要閣僚であるジャビド保健相の感染が判明。濃厚接触者のジョンソン首相ら主要閣僚が自主隔離に追い込まれるなど、コロナと共に生きる道は決して平坦ではない。ワクチン効果に期待するしかなさそうだが、英国に限らず、コロナ感染をめぐる不透明感が相場の不確定要因となる。

先週は、ラムステン BOE 副総裁やサンダース MPC 委員から刺激策の解除に前向きな発言が伝わり、BOE が早期に金融緩和縮小に踏み切るとの思惑が強まったが、今週は一転、当局者のハト派寄りの発言が多く伝わった。

ハスケル MPC 委員は「インフレの上昇は一時的」との見解を示し、景気が完全に回復しない中で「早期の金融緩和縮小に踏み切るの正しい選択肢ではない」との考えを表明した。また、ブロードベント BOE 副総裁は「インフレ高が持続する可能性は低い」と主張したほか、「労働市場のデータを注視する必要がある」と指摘した。更に、9月から MPC に加わるマン氏も、最近のインフレ高の持続性に否定的な考えを表明し、ハスケル委員と近い見解を示した。高インフレへの対応を巡って、中銀内の意見の相違が一層浮き彫りとなっている。

加ドルは、投資家のリスクオン・オフのセンチメントの変化や、原油相場の動きなどを睨みながら神経質な動きが続くそう。世界中でワクチン接種が着々と進んでいる一方、コロナの感染拡大は収まる気配が見られていない。楽観的な景気見通しを疑問視する声も増えてきている。原油高も景気次第と言わざるを得ず、コロナの感染状況や経済見通しの変化に注目したい。カナダ中銀（BOC）は7月会合でも債券購入額を縮小し、強気な景気見通しを維持した。金融緩和の縮小路線を進める構えだが、政策を材料とする加ドル買いは次第に後退してきている。

7月19日週の回顧

今週のポンド、加ドルは対ドル・対円で「行ってこい」の相場となった。週明けはコロナ感染の再拡大で景気の先行きに対する警戒感が強まった。株安・債券高に伴いリスクオフの円買いが先行したが、その後は株価・債券が巻き戻され、リスクオフの円買いも後退した。ポンドドルは1.35ドル後半から1.37後半まで、ポンド円は148円半ばから151円後半まで切り返した。18日に、石油輸出機構（OPEC）プラスが協調減産の段階的な縮小で合意。週明けの原油相場が暴落したことが材料視され加ドルも急落したが、原油の買い戻しに伴い、ドル/加ドルは1.28加ドル近辺から1.25加ドル前半まで、加ドル円は85円半ばから88円近辺まで持ち直した。（了）